草縁集

二

へ 2
1059
2

草縁集巻第四

天野政徳編

短歌部三

夏

更衣

山こえなくてみよかれ冬かへるくれゐろのうすきみかは

景寛

かへるこそなつくよけれ花染かへるゝたれとそ物思ひなる

建胤

更衣惜春

花よりは母屋のさむしろにのこれるかへてくらし きさらぎ永にけ

寛光

首夏蘇

夏かけてなつひとへすし蔭なみの衣には風とまつとならねと

政廣

うれしさよの垣根のはにきちたるのたるまあこえてかくるいろかな

定保

さゝ夜の空とて　光敏
雲にまかふ月の影にまかふれて山のはとほきにみえにけるかな

首夏松　寛長
夏きたる松をへたてにおほはれてまかねさきはあかくせなむ

卯月に花のなくときゝて　寛光
ちはやふる神の夏そて花ちらしとてやこらなくらん

逢擢　定保
こよみたてまつりけるとやまのさとのおそまつにちかきかはまにやはるらん

残花　元吉
ちるちるかたくへにてもつけさくは春の残のちれひとりと

余花　春登
咲のへきたるにおくれて山かけにおりて花をかなるをちれうつれ木

[illegible]　[illegible]
なかなかをちよるそて花うつかなら[illegible]

山餘花　寛光
ゆくさきとをしにさくをみかれてしきなは山路にたちひやさわせわ

山家餘花　興清
谷ちかくすむ山里とはうくひすもかへるとしくもさちれにこれわ

松陰餘花　景寛
山まつれかけにさくられかひかわてちらしさかわをみれるなかくわ

新樹　季彦
あをねさし葉ひろく海かしまかへてさきにかへりてみてくかけわ

遠新樹　常久
ちかにきしとれかとかのそれなしそてまつ葉にかゝる雲をなかわ

[illegible]　忠虎
秋まつるころとしなれは秋のつゆかれさかねまかれさしけり

雨中新樹　千川
村雨のそくみのみとりいろみれはれこれるさもれにそわ

雨きこゆる夕の窓さむくにこぬ人をまつよかくれしさるのきそてふ
半收

新井
木枯のへたてはなれとへたてなくおもともぬかれにおつるまつのかけ
昌寛

卯花
これみれとあれてやとれさしとそとなれしの都と名におそらせなん
子川

りくたるにおくれし螢とみるはかわ庭のうつきはた月にうかわ
好秋

夕卯花
くれぬとて松明はとしさしつれなたちのかけをたのこれやまとなすと
應章

秋卯花
られなたちのさきめるころは何しひなの木のしたかけとゆへやみぬなき
明儀

山家卯花
やまふかききえぬ雪かとおもふまでたちのかきねはまさけるしなたな
政明

河辺卯花
あさなみにぬれきぬおもひそめ河の井しのゐくひにかくるうの花
寛光

社卯花
ちはやふるかみの八杉のそれなしてうの花さへさかゆる三輪の神垣
直利

うの花をおなしく縫たる森にはまらくとすれは
恒雄

叢露
ふわくへてとよへかゆるの卯花のゆ花にひとのゆとれいとよし
いせ子

ふさらにゆつひのつゆの玉かつらかへそはし花やまなのゐなそ
山里に住まる
喜麿

山つたひうたて里ねのちかるや引袁の袖のまつわちるらん
郭公
春庭

あさきめの空にしのひてなくらむさとまくよふの山ちとくきん
宣風

峰こしてゆくほとゝぎす夜のまのいかにみかたるこゝろなるらん　徳風

おとゝきゝまつそのころになるゝれはこゝろおちゆく山のはの月　蝠翁

いねかてにまちつゝとれはきのやとゝなきてたちゆくなかほとゝぎす　定保

うつゝにはたやかてきんほとゝぎすなかきのおもれよそのひとよねす　直賢

初ときゝねまちつるかひはなけれ月またのあてにおとゝぎす　子川

尋郭公

たつねつる山ほとゝぎすなくかたとまれにをしへよ杣の宋人　信一

つれなしとうらみしもそれたつねみんきまほとゝぎすなかあかきのへ　政辰

おもしろその宋人わくかたにたつねてそいるやまほとゝぎす　養阿

家つとにかたしんはかねたつねつる山ほとゝぎすひとこゑはかり　安ま

待郭公

出やしぬやまほとゝぎすうれしさもなけれ咲ちるころとまつやしけや　茂雄

雨されたちてもみてもほとゝぎすまつことさつきのころかなくかな　政明

いつまでもものいはさてしほとゝぎすおかぬときかは後にきかまし　勇雄

月夜よしみふさけにほとゝぎすこれかつきをとこしにゆくなる　周朝

あれとしもまつ夜つもれるちわひちの山ほとゝぎすなか一声もかな　正之

ほとゝきすつひにはわらはあのひねをなと人ことはまちこひめらん

戸塚の里くの鉢木を隠ふ家やとらふしをおもひて

ほとゝきす一こゑはかりをとてなれは　喚情

なまくに人をとふ夜はかへつらんにしかしとまたなたさらまし

久待郭公

ほとゝきすまついく夜ねみにたのまれぬまつあれくやとおもひよひかな　直於

夜ころも(?)なち(?)めしかおとゝきは(?)まかき(?)のそれおとつれもせぬ　啓行

ほとゝきすこゑまつかねぬまてつらくすやく人にひかれふるあは　季鷹

人伝郭公

人つてはかひなきものをほとゝきすまつなのそれにはたすらくかわけか　諭方

いとしくまたれしほとゝきすむすつと人はいはつけてと

卯月郭公

めつらしきこゑにもあるかあやめくさまたぬへき月にこそあらくに　寛充

卯月のはつかあまりの日けふとききて月かけきゝあかれそれなほとゝきすこゑをかはそさやけかれ　通顕

初郭公

ほとゝきす世にふか出てなかぬまやかつくれなゐれみ(?)はなつ　大平

人つてにうれしきものとほとゝきすそれなくしてはすゑの袖のこゑ　久古

始聞郭公

風なしし夕月とかしつ人はたれをかわすれつねやまとおとしあれ　流阿

きけはまつきゝにかくれぬるこゑなかし　初めつるしほとゝきすかれ　應章

暁郭公

ほけはさんなくしほかなしおつるほとゝきすてまちやつる袖まちつゝねと　長蔵

まちわぬ人のこゝろをしらんとてや夜ふかくならは山ほとゝきす　言行

ひとこゑハなへてなくらん家ハけさ待まちひなくやまほとゝきす　景寛

時鳥を聞て人のよめる

世のことにまきれし身にもきかれぬハ今ほとゝきすかなしかれ　興清

深夜郭公

ほとゝきすなくしたひやしらん家もいまひとこゑなかまほしの林に　仲舒

遥聞郭公

ほとゝきすなくやしのまてはたゝれぬひかけ耳なれやさとちのひとこゑ

時鳥幽

ほとゝきすそれかあらぬかさやかれとおもひさためん一声をかな

郭公の初花をひきてゆくかな　寛光

巣にかへる山やまのなれしこゑとみつのなきのこゑやたとへる山ほとゝきす

夏中郭公

ひとこゑハうつゝにおもひまたねともいやはかなくも山ほとゝきす　秋浜良

暁郭公

ねさましねかひくとなほなくらんときかれねさめにさとなく　宣風

ほとゝきすへなくれおかのなくらんはつねもにとの人のきくらん　野渕良

待わたるはしにもすいかへにハ手枕のゆめおくへしやほとゝきす　徳風

まちて聞ひとこゑハまはとたゆむあかつきのまてゆるさぬほとゝきすかな　常久

曙郭公

ほとゝきすやゝかたちそみし夏とをうつにかへるあけをなく一声　世温

朝郭公

夜のねのまにかくれてほとゝきす月やたつぬるけさのひとこゑ　長収

ゆかしとかたらしねさめにきゝておもしろきほとゝきすかな　保之

暮景郭公　英好

夕まくれたゝみそらにあくかれてゆくかたみえぬやまほとゝきす

夕郭公　れつ子

やとやしてたけほとゝきす夕くれはまかきれ山をとよまさんと

雲間郭公　寛光

そらはひめてつゝめるくもの袖なからもらさてなくやほとゝきす

雨中時鳥　大平

ほとゝきすつくしゐなかのさみたれにあしたにかたるなく

雨後時鳥　叢

なれとこれ今かきけとかほとゝきすけさみたれにふかいてゆく

明儀

はこなれやたれゆくかたのほとゝきす月にかさねにきらは一声

松間郭公　寛光

ほとゝきすまつのひまきにねところて声はまとほしさみたれの空

名所郭公　勇光

ゆふひさの山田の原のほとゝきす郭代なかりし声を今も告也

定保

たしかてとかきていくそのたにかけろゝ声をおとろかす山ほとゝきす

他国郭公　本孝

ほとゝきすたれにとくしつれも人まにのさちくれはなし

禁中郭公　幸齋

清涼殿たくひのかけにほのかくとはかつきもかくなくほとゝきす

旧都郭公　堯磨

ほとゝきすふるきたかつみ古京に又なれなしれかれもなくなむ

市時鳥　徳風

市人のとよむ声けにほとゝきすそのそらこゑはなほけかしかる

古寺鐘

あさきめてその鐘にさそはるゝ花もかはれ山てらのきは　妙貞

山家鐘

おもしろきはしのさそひ出たる山里はわかなかまへくるなし　花英

閑時鳥

人はまね不夜の閑居のまどにおそたれにきけどあはれなくらん　千川

羇中時鳥

おとろきは手児ぬいひ旅もひるまあらかあやるたいれなくさに　徳風

海邊時鳥

またつきれ手にほとゝぎす鳴てはつきよるしふかとゝきゝえ　原相

船中時鳥

ゆかたな舟出のつましもとをきゝそれなのゝみなとのいかとれひとつゑ　花収

鐘遍

となりも地れ村里みちつかく鐘のかねをやちくとおとゝきん　政美

鐘欲帰

秋まちて紗の露にもきえいるゝ山路のしがにつけてこる　久義

あとらぬは鐘のかね月見るあやこゑれかおもてとねへまたるらん　倭綄

早苗

うゑぬまる絹そめにて今へ来おものみとしいはる枝はかねてみゆえ　承

世にこきれおもきふかきにさむくとる田はねまはくるたふかるかれ　安す

とるきまれ沖世のさくもて小山田にくるゝもるれもさかへとる家　政徳

一筋の門とあをまちて閉まけて十市の小田にさむくとる家　満す

まつけゆみうるともえにくしおきなを横ふてなにははいよよまねゐ　菅雄

夕早苗　雅子
つなとれる木のまの夕日かけうつる田つらにさなへとるなり
時傔
入日さし岡べに苗を取りて妹がさなへとるやいそくなり
貞時
子町田にひくしめ縄のゆふかけてまろきにいそく神のまかなく
山田早苗　與清
なかしぬ山田の田簿せきとめて雨のなこしとはやくとるなり
直貫
小山田にひくしめ縄のかきねとはいそくとやさなへとるらん
俑早苗　八穂
沖津風よせくるなみのうちむれて田子のうちひと早苗とるなり
なへ子苗　與清
せきいれてうつるなみせきてきさなへうつれ君よみそなはゆく

雨中早苗　原相
おとろきはとまらの岩に五月雨のふるさと田とやさなへとるらん
さなへとるかゝる田つらに時雨なく　菱雄
おほかたとゝきゝきてさなへとるはたかなたんと田せとふなり
五月五日　也英
今かとふへてあかちさなにあやめをとかなるかし花きぬのいろかな
菖蒲　時傔
みなのくれあさかの沼にかたれさねさしんふかきあやめひくらん
詮方
けふとてやふけるあやめの枝ひさしひさし花よりのためしなるらん
戯菖蒲　近嶺
ここにかにそれとあやめは見かねとんかくまことをあてひかんとるやよ
寛光
家にあやめふくとみてよめる
まつやとのひさしのあやめおもしくいさ月のかるのねとそへておけ

くものかゝり　　吉磨

ほやけせし神もいくそふるさとの山とほくてなほ菜かゝやせん

月前擣

久かたの月のかつらもおひかぜにかをやけたる打のならまし　　寛光

一夜擣衣愛

みし夢のむかしの人の袖のかにかをるゝねさめのきぬたならされ　　春庭

五月雨

舟とめし難波のはれぬ日をしらでむかしにかへるさみだれのころ　　吉磨

さとさとのよかはにたえぬかゝりびのふくるまにしけるさみだれの比　　春雄

笠とめし小舟の浮草をもこえてよしあしをしたふさみだれのころ　　秋彦

なにはかし春日山のかひもなくさみだれに袖かわくまなし　　国秀

さみだれはやまのはにのみかくれつゝ月のかけそまだなし　　それ子

夜五月雨

おそれ井のみかくれたる雨の音さみだれの雨　　京寛

降りにけり夜はまたれておもはれぬさみだれの頃　　子川

朝五月雨

ふかきたよみそらかくるみしかよりふりくらしつるはさみだれの比　　志け子

閑居五月雨

よもすがらきこえしそのやどにふるさみだれのころ　　吉磨

市五月雨

うちしめて市のうちかしもふるさみだれかな　　寛光

川五月雨

あれはとへいつよりそみてかの川にさへかはるさみだれのころ　　子川

はやされてはやしひろしかと錦鹿の千歳にいきぬさみだれのころ　秋風亭

さみだれは枯れ小田は浪となりて棹さしてのりものしたしね　惟重

渓五月雨

谷川はいとねつたひはなかれまて流せとみえぬはみだれには　貞民

浦五月雨

玉くしげはこねくくし出る日とともにあれつゝれさみだれのころ　青麿

五月雨欲晴

とみな弥いのなしぬさのひかきぬをるつくちれかはくられぬる　春登

五月雨晴

さみだれのきつくはけさハ人わかさるひかけやれきゝのくちめたきらん　七成

くもいまみれてはきよし肝腸かしみつの露をさみだれにける　反阿

薄暮水鶏

夕まぐれまだきにたゝく水鶏のをさしてと門はたのみやしきをと　青麿

深夜水鶏

本ねまよるあかたの昏れ月ふけてさよふけ波に水鶏たゝくなり　子川

社頭水鶏

神よとてあけの玉垣たゝくなり錦とえたなる森の水鶏は　宗寛

照射

よしとてはなくらしかとまつがねに山路さつきや松かさの森　安方

ちらぬよのちやまれよしさしぬる月やをしかれいのちなるらん　秋風亭

ほされたかんぬやみにまよひあて火くしにむかの床のさとしら　茶

遠火照射

みよつ火串にかてほけにゝかたらふ峯まれみしかよれそろ　青麿

宮柱にゆゝしみせしとや照射とと　與清

さつきやみくらしれまつりかひなしやあくるまくまたねれみしかよのころ　盈子

原照射

まつ人の来るとかさねつあつさゆみいるさの山にともししさらん　八穂

照射獣雨

さみたれのくらきれさすとまつかけにまちますやしかれいのちなるらん　妙康言

鵜河

よしの川下してぬきのよのなごれかひやかゝりさすらん　寛光

ふものよハかゝりてなひとくすみはよ鵜ぬつかふかなしみれや　勇雄

おなし河鵜ふねしきみ棹さしてはしりひれあみ鵜かひ舟かな　貞行

大井川うふねのかゝりさしちかへ一流れなるおにしもみしかな夜

深夜鵜舟

五月雨のふけゆくまゝに影みえしうかねのかゝりほそさかりゆく　孝麿

蚊

おほきみにたつるけふりをくゆらしまた松かえの羽風かな　與清

蚊遣火

さとゝほみたつるかやりのあさくいふやくみゆるまつりかやりひ　資子

蛍

草のかけとかゝれにたきてうへそすれ一すちとふねとれるれたるかな　與清

とめかね玉の緒とれみつるかれやうちなひたくさむしれけ　陳く

窓前蛍

みるとハしみれはみかとたかにしとちしておたるのまとてらさん　宣風

河風のけつまとれよしひにひかりをつきてゆくかたるかれ　幸英

喜磨

おほろかたちおもろそつきしかとそふくみてるよの空のちらちらは

田家蛍　せい子

此風にこほれぬ露とみえつるは門田にはなくほたるなりけり

江蛍　秋成

ちる露の玉江のまこもふく風にふみたれてとふほたるかな

漁舟蛍　大衆

漁舟やいさりひたえて秋みえて西のはへうとふほたるかれ

精霊蛍　野洲良

よるひかる玉のとなえの精霊のかへにみたまのかけハちりたるなみ

夜のふけて蛍のかけしよそをみてとかくとるすて　新喜

夕月のかけかくろひし木のもとのおのれさかりてとゑほたるかな

暮蟬　喜遊

しめ滝のちかきにひくしたくせみのこゑやうきかりのよのなれとかけ

梢上蟬　秋洲良

にしひかし木のうらすゑにたくせみの八千のちまさをとよめにけり

遠樹蟬　智雄

ふきおろしたとものこゑ遠の樹をかたかにひくしせみの声かな

夏草　茂岡

これころハちまさにたてるいとすすきつゆまつかにたたるさ

夏草滋　言行

かやにふて家のありかともみえしかのたちよりみえぬものへかな

行路夏草　喜磨

すそふかきこの坑をうつりて秋中にまきよたつのたひ人

風前夏草　大平

たつくさのさけかへしたよ秋風のかくろひかねてなひくほのしき

夏草露滋　喜磨

家こゝろのかけんやうつる秋の井のみなひかりやそるるのみまくなき　寛光

水草滴舟

かつらふくやとはおとろえてゆくふねのこゝろもちすゞしのはつ秋　子世子

小舟こく棹のすゑのたえぬまでけふろふかくしげる川あし　寛光

朝兒曜青

株とる家とる床ての面影のとこなつに霧のゆく月のかけ哉

箱根にゆめとせしさ北山とともに百合のさとのちぎりかな　與倩

さこね山くらふかゆわのさかしくさかぬ花とかつねてそとる

夏月

入かたのさきかのみなかさにたのくはくる夕しかくれ月　武秋

江戸のやとはにて夏月とと　憲善

まつくさあやねのかけねやれとと夏の月よはさえねにけり

夏月明

夏なかくとや秋萩の山のねんめよみかしかりにふける月かな　春門

夏月涼

風かよふまとのすゝしかけおちひきなくわくる月のかけすゞし杜　鳳山

竹間夏月

よひなからとやふけよそ呉竹はよなかきわれとこ夏のよの月　尭麿

下とわれまおちの竹のひまくに雲をおさらくなつのよの月　子羽

夏の月のおにやよれるとを

風ふけの夏とさされいうしろ月の影くらよされのあらしさ　盈子

雨後夏月

久方のあされてほつし花時鳥わかれわかたる月のかけかな　志け子

海邊夏月

伊勢風ふなつきのうら浪ゆけさ波にやさかし月そうらせくる　景寛

名所夜月　古收

ふしねの雪をいそくゆふやにきそしはとをりしらなれよの月

松陰夜月　安加子

松かけはほのしかわけや夜はよの月こそ秋にほれえのさま

春門

秋はたゝころつくしとそくいんなつはこれまの月そゆかしき

瓜　寛光

こかけまてかしわたちまぬ家たかし皆いれつへきうりわさたけかれ

喜麿

かしくれくつないれそれ見るへく天流れきつ菜れらわになふなわ

池蓮　美平

はちはさく花れ茂るもちくはひてさゝなみかとゝるいけれ秋かせ

蓮香　林次良

ほのしさそとまねく玉かよ夕まくれそはれるかを香にむすふしら露

なかれれとひいはなけちてさちはなのにくわにしまぬ香れしたま　原相

夕立　高蔭

雲さまさひかわみたれてなる神のおとれとゝろれゆふたちのそら

遠村夕立　芳英

ゆふたちはいまやふわえんなる山はたれくとゝきゝかせさわくちわ

海邊夕立　翰之

かしきめをとみつゝとかたるさとへれとまにほしそらとものゆふたち　林次良

僕夕立　拉風

夜かわれいれやれさとにすしもやくあまくもとかちへけれたちのそえ

夕立晴　寛光

みなかはちにはそちしもまはうれてゆれこなたれかくるゆふたち

なる神のおとゝきめて箱根山日たゆくれにおとふきかわれ

扇　春門

こゝらの木たかき梢の枝はなれ鹿ぞなれそよくはすゞしき

扇に影かきそへてと人のいへるに　誠彦

人ごとのあつく思ふ花のかみなかしこれは風ふるひれといはまし

氷室辰夜　亨固

ひむろ山ほの風ほしみつきほとそれみなの月もほのまなかれに

泉　茂岡

草の木も志をとまきかれてこのは山しほ水をかれなかれて

岩泉　常久

むしひてはこらぬ庭の名かくみすゞしきかけは立ちしにはなれける

對泉避暑　誠彦

むすふ手に夏をとはれてけつ夏の夕さめのしみなごとそしられ

泉邊夏　啓行

結ふ手にこゝろはかるふほしきやましはなつをとはるれるなる

納涼　正音

夜ぬよいほしみかてらにちりてかつりとらに月にあかしつ

松陰納涼　宣風

あつしさにおりひゞきれとまつ風をいとひしまつの木かげたちはなれ

山陰は夜もしこゝすゞしを吹けてかけしほしく秋かせぞたつ　俊徳

志けみ深き相の葉されちるぬまなたちよるかけはほしかりけり　在雄

たちなるは梢のかけのほしさはとおもや秋のほみかたをらん　磐根

たちよれは風に一葉のちるぬまに秋おもえたる相のしたかけ　川や子

夕暮納涼　春門

すゞしさは月のみかねてほしきかにひかわみそらくるいそのゆふかせ

かせふけはまさ波にかゝる秋かしらあるや川への柳のかけ　吉沢

すゝしさにいさゝ小河をゆくひかちらをわたしてぬれさらん　言行

やほへ八さをたよする夕かせにはらひやすらん露はみたれて　子川

久戦

川邊納涼

月夜よしゆくたなかしはみな河のくるゝも夜にいとはなかれて
もや川の堤にくまみそ　義格

夏なからゆくみはしもや川のはやくれそこに秋やかよふ覧
こなた月まつ木田の荒にかけ茂川にはなひかるとは　永能

くる山の夕たちにくるをみえてかれのはせのあまさるわ　景寛

井邊納涼

つるへ縄たくりてくまする筒井にはまさるのあるをむすふすゝしさ　矩雅

海邊納涼

たくはめてまたきに秋のよるなれ磯まをまたる風のすゝしは　秋海良

名所納涼

なるとしもいさしらなみのたつさはこむろの山のかけにして　寛光

難波江にはしまきすゝしく玉かしはにつれて秋やちかしらん　秋海良

僴路甚清涼

やよひにまゐりちれてもおもちは夏とはいさとやいさわすれ　久戦

松風秋を

夏なからまれまつやまたみあらしは明風吹きし秋やこゆらん　季齊

夏猿

心さへはらしくちかぬみちをしてかへるゆふへはまつ袖のみかは　宣風

みそきせしぬさのちりまてなかしハ秋のゆふへの物ハおもはし　喜麿

つゝけかれことわりきぬやみな月のゆふへみそかにこそかよはせハ　久我

人ことのことわりなれとたゝ秋をまつせになしかへはせん　いへ子

みそきしてなかれはみたらしはまけふしくはなかせそよく　寛光

六月祓

玉ひかるしらか柳のつゆちりてはさかみくつとれみそきまつる　子门

三夜月つきのかはりは

いなつまにゆふすゝしき才ちの祝詞山はとたかにけるかな　應章

みな月に萩の咲けるをみて

まねしはれたれの都のかへ柳秋をまたぬ萩にしはる　春雄

晩夏落日

やゝやまて山へかくれハたそかれはよはつれて家にかへる　龍喜

三夜月末つかたことわりなれなくとおもひて

夏ふかきよそのまつにあやしきをそつけてゆふかたかけれまつ　景寛

六月立秋の日百花園にて

ゆふかれうちにたちましわたる秋たれハはましもやいかんはつしもやらん　完早

夏こ家

されぬるおいゝはつくつゝめつらしくゆきをみせたるさみたれのそら　春庭

夏秋

夏のよハたゝ一よをとかさきはまつとせしまたゝはくらしれし秋　承

夏雨

ちるのかたねふかはるとちとなくはけかなちかきよのよくかな　盤根

ゆくれをとかさとりあたなくせみの羽袖はらしくめくりさめ

ゆふしほ清き河瀬にやなうちて鮎とるころもみれなほしょ　流阿

麦秋

ゆたかの麦は秋かぜ吹たちてうれしみちにまこゆるころかな　與清

夏田

あたえし山田のさなへ人なきハほのみかそうにいさといはましを　春登

夏夜不

中川のやどりはすゞしくゆくあれいつくに夏やかくれかくせし　芳収

夏木

かわそめまあふる梢の木のやとり木本ものなとすゞ書のいろかとせゆか　常之

夏井

かけとむ此月のひかりのやとる夜ハ夏さくさかしかほかゆれ多　寛光

夏のよハやとれる月のかけとほしむすぶほとしあすかゐの水　野洲良

夏遊

よしゐほる夜たそてころもほのかしろふきしく風に夏を忘れて　徳亮

夏車

ところせき物見車とを非山のみぬれのあふひ門つるねけや　野洲良

夏門車

なつもかく秋としつる松風にひきとるあたるかとれをとるま　春門

草縁集巻第四終

草縁集巻第五

天野政徳編

短歌部四

秋上

立秋

よる人は衣をは花のふちにぬぎてけさたちかへる所紀れなつかせ　奥清

みそきは世ゝひにてゝれう紀ことをさらにおどろかゆる秋は来にけり　雅良

川風はまだ身にしまで秋たつといふきのふになる荻の上のつゆ　春磨

立秋朝

秋のたつけさは木陰にとめぬまで吹くる風ぞすゞしかりける　可貞

川立秋

みそきせしぬさならねどとまれはおちたちつゝや川の瀬に秋の来にけり　野風良

初秋
けふよりは秋のころやいかならん相の松もみちぬまさきのはさかり　寛光
いろかへぬときはの山もふくかせのみにしみそめて秋はきにけり　春庭
身にそしむうらかなしさもはかなくも袖にいさゝか秋のたつかな　帯久

初秋風
薄衣うすしとしるやきのふけふ秋たつ風のけちめなるらん　季鷹
秋風の立てはけしくおとするはをきのはすゑにふきしおとなるらん　景寛
みやこにはまたしらしなたつ秋のいかにふくらんいその松かせ　安子
蓮ちりはてし池のさゝなみ葉のすゑさへそよふかし秋かせそふく　千蔭

初秋朝風
うすしとも思ひてなれし麻ころも朝けみにしむ秋のはつ風　春麿

風告秋
うちつけにたれとはなしゝ秋風や庭かてよさむのはしめなるらん　仲舒

芋葉告秋
秋をまつ露のひかりにうつせそめてさくや秋つの月のさかれ　寛光

暁初秋
けさよりは八耳によそよきおとさはたかまつのへのはのちるかな　啓行

初秋月
秋のくるけしきの山へにこころえてさやみか月のかけそさやけき　春麿
秋といへはまちわひのかけにしもこころひかるる月のいろかな　久義
よひのまにすこしとりのめくみには秋のたにくれとまつる月かけ　明儀

初秋露　　與清

とふ人もなくし草子まれたるのにむすひむすひ露れやたまをいつゆらしけん

けさハそよやなくてもれたる秋きぬとくされまくらにつゆけかりけり　　建流

山里に住ける頃初秋の心を　　定保

みやこにハまつ入たらぬ秋かせのけしきはかはとそらにみせけり

田家新秋　　春門

たかみたと門にむれゐてかはしもをまつやいなきれ秋のはつかせ

田家早秋　　寛光

かれくる田のものいなき穂なひた秋風にたちあみしれいさと

江早秋　　子川

風をたつる舟江すゝしとおもひかなとそつひにかく秋ハたちしを

早秋扇　　定保

としへにけふ見たちさぬやまひとりおきてやまはれん秋のハつかせ

秋くれとおのふれまのなつさにてまつへきわやれなふきとくなし　　子芙

手にたゆくもちなれしなる扇さへけさハよそにて秋のはつかせ　　れつ子

残暑

秋きぬと人にいへともふみ月のそらとかまくもあつふなりけり　　子世子

なれぬかれ衣　　千川

ころしてこよひハいそけ麻衣ひかてくらしのおもふとなきみに

よそにてもおもひやられてうれしきハなかなかいつのき衣なれぬ　　長英

打合のそれたちこめてゆくる衣を志たしハれこせなきまの川きかは　　正美

なれくるのなかきおもひのたるてきそ秋のこよひハはぬ住なれたん　　佐や子

こよひとやわかれのなみたてぬれきぬはたかおほせるらめしはすれのかさなるを　正義
たなりてあさるしゆえをとみる人あゆ　季彦
梢桟にころもをさへやかしにけんなつのくらはなちまたれ川
なぬかの日晴子の里より瓜あはせたるをともまえて　寛光
たなはたるにまちてとこそおまつとなるこの瓜にはやしかくと　それ子
待七夕
たなはたのそらなのめせぬ逢ことをまちてはくらし起々の夕くれ　長恨
羈中七夕
たひねにはおりしのちまよとおなしんほしの枕ほさかしてます　吉光
ゆふにて七月七日のよひに
なかしかさとちさこのよけし彦星のとしのまたわれ毎夜やにえん　彦麿
七夕の旅するとこ人のよしけるこたへに

おり合のことをなかしつたへきてせることなからしはすれはなくこ
七夕草　德風
天の川またわかにぬれし姿とも一夜はかりみせたる萩まかせかれ
七夕雨　可貞
あまたふかそとしにひとたひまたるそ今年のはつかしのあやまるらん
七夕後朝　れつ子
床夜の花におきゐる露やおりしのまかれのなみたなるらん
萩　吉光
秋のきて一本二本と萩のさのそよみるきけはさねとほしし
人ともあ肝搗の萩のうちなひた夕さりしくなきかせそふく　勇雄
萩風　貞暉
おきふしは風にまかする萩のおもとをおのねさめの枕にそたく　春庭

おもひやる外山の秋のゆふされはまて軒端にかよふをしかのうハ風

なかさわに咲くる風に萩の葉のよそにこゝろハ身にそしみける　久義

深夜萩　千世子

みし夢ハいとなくさめてふかきよの枕にのこるをとれうハかせ

萩音近枕　承

萩によるひとよひふつかとも枕のほきまくさゆる萩のうハ風

閑居萩　と哉

おとつるゝ人しなけれハうらかれなからも志ほりまれくわをときのうハかせ

萩はおくつゆのやとりのまかきのちかはしにちらふ秋の色　石好

江上萩　たつ子

ひとかたむれきハきし花のくれにそよくにほふ庭の萩かな　季彦

たつ夢ちおとろかしん世つとく入にほのほのをれあたかせ　好秋

萩

まん人のむかしかさしなれまくのつの秋さかりさきにほふかや　秋園良

萩盛

咲そへハ七秋のちくれてむつきのつきへよそほゆる秋萩の夕はへ　承

野亭夕萩

やまかけの月にやとかる世かけやうら萩のたそかれにねはくれにゝわ　俊悦

萩隠野径

ふかきとさしかもそハ所々秋萩の露にみたるゝもへのかよひち　勝

名所萩

こゝろなくゆきかふさとの人の秋やひくまれのくれの秋かな　宜風

庭萩

秋山にハをしかなくらん萩やその秋萩のもまさに花そめたりけり　雅之

月前萩

風ふけは月のかけさくかつらかれかつたなひく雲のかゝりし萩
貞時

夕かせにやとれる月のかけなからこほれてちる露の萩のしたつゆ
元吉

萩露

つゆむすふ萩のうは葉もちりなひけいろそまさるとたく秋かせ
古石

にほふにも露はおけとも秋の野の小萩かうへそみるへかりける
通顕

秋情寄萩

萩のはに露もおけくおくものはかなしとをはなみたなりけり
貞氏

八月十五夜萩の花にいはひて

さくまゝのいろにひかれてかへるさにわすれもちぬるは萩の秋の花
春門

麻交萩苑

まくらとれへの揮麻秋ちさきれうつしてころもちゝにかしつ
後洗

秋の野の花のにしきをかたしきてつまやまつらんさをしかのこゑ
景寛

白き萩のかゝる露に

つゆしらすそれはてそなれ秋の野のしたれし萩のにしきふさかるを
野訓良

女郎花

くちなしのいろにはさけとをみなへしかすみけるにはそてそぬれける
宣風

野女郎花

むさしのはなまめきてつまとみなへしつまこのれやとふへかゝかな
定保

行路薄

さとのまろゆくてのうへの夕かせに手招くをはなそよくきをとめ
芒服

月前薄

初尾花ちるつゆにしもやとれるて月をやまねくそその秋かせ
ゆ汝子

まねく尾花に

たひ人はゆきのともなひやらしまねくをもちらてそひかれて
の好子

秋の七草のこと

いつれをかまつ折てをらんさまくに咲ましりたる秋の花くさ

女郎花尾花ならてや男郎花 寛光

うつろふ色しつくろはぬなまめいてまねきをとめつる露そ花かれ 子川

芋露多

さはつくも芋の葉にかくへてこほさぬさすまてはおもしろきれとも 翔之

月照芋葉

やちくさの花野は月をむかへてはいやたのしきよるのにしきなりけり つや子

ひろのおるひかりをまけて百千の露をかくしたる露にやとる月かけ 安るる

芋葉露

さわくにあまつかせへの風さかわされたるつゆを見きのまゝ ちや子

思野花

かつらきかみの尾花おれにいそていまやいつくれひとまねくらん 綾鏡

兎逢芋葉

さほならて夜にさかりおくすのはひれみつる萩のすそをはや

槿

はかなれとゆふへをまつてはなとゆるかれ露とやまとろ花おもかけのまほな 卯吉

朝かほしはやまふさのおもかけしさかはなたむるはなさかなれ落 武兼

たかくもとまかきの露のよくあさくするこそあやまるおかれ 定保

こころある人にしられておもかけは花もあらましとけしかるらん 子门

垣牽牛子 奥清

はさかほのさかれいろくさあまけてつるさしぬへてやよのそてかき 喜磨

桔梗

葛

くすの名にあわれひきさとはさかりとたれかいはやし露のぬれ衣 定保

なせたみいそねつかひのはとゞめて秋かせのおとろみねのくれまつ　喜久麿

鈴虫

ねの手世にあかれまうしおあり　のこゑにきゝわひめかれ　喜久麿

秀世人派

うれ秋とおもふ　みさやまとしらんとて　のかたの　へのしる家　緑浣

虫

いまそしるさかれの秋のかなし　きそくおかいしのおもまさかたとハ　喜久麿

數臺

おかしん秋の庭さむとつみかねにてかよきつれとやなつく　數臺

尋虫

たつねよる人もなくてやむかしわ世にまつむしのねはなくらん　高彦

尋虫声

ゆうさきのゝよそふれはなくむしのねをたつねてそまよひまよひ　安考

野外尋虫

承

おかくしたちれへたてゝむしのねをたつねくるれは秋の夕かな　八種

庭虫

秋たきれ下葉さやかに月みえてむしのねたかきはちすのみそ　きくこ

前栽放虫

こゝにもしれへてゆくつれねやむしのまかいくよかれせさくらん　春門

前栽に虫をとりはなちて

ふかれてうれにちかれんくむしの声をきくかのよにおもふゝや　盛章

籬庭虫

むくらふの庭の板戸のひまよりもみ月かけもるゝよにはむしのね　子川

野亭虫

ふるくしき世の庭にかすれてむしのねをきくよわくかな　奥叙

草花虫

ねさめにるよもすから月みえてこゑよりゆく庭のはむし　子川

鈴虫

くれぬとて小鷹手にとるかへるさに野辺にゆきてかへる新しき秋の行
小萩が本尾上に鳴し鹿もくれてふかくなる野のすゝきの山のゆふくれ　正収
さよ更てうつゝやさしくなかれしぬの草の野の鈴むし秋の声　貞民
これはまへきゝしと聞ゆるへの家すゝれまへに人まつむしのこゑのかなしき　松虫　言行
萩の花のつまにつくしておもひし秋の野をと聞て　俶良
秋きぬとなく萩の花に置く露やうつくしとおもひしとなれるかなしき
小鹿　新麿
おもふことありとなきかはるゝ秋の野のさをしかのつまとふこゑのみかはなかるれ
小鹿も秋しらぬけにかなしと　寛光
鹿もなく萩がもとの花の秋のゆふくれのかなしさまさる野の秋
野秋風　孝麿

ほしけにいしの狩衣すゝきつゆをはらひつゝ秋のはつ風　雅俶良
寧楽なる山本寺の三坂をこえくれば松かのはしげに秋風ぞふく
古都秋風　貞麿
秋風はいにしへにふきぬれしかちるなほにくたかつれちとをところ
夏秋風　季秋
こやこのは秋風ふくか関の河のせきもりはひとまねくかな
簾　常之
あひおれの山のもみちの名にいそつまやこふらんさをしかのこゑ
俶良
秋日山こゝろなをたちてさをしかの声ひにたてぬつまやこふらん
春雄
たえとしかのなくねさらかにきく山のとのへりゆかし秋の夕かせ
夕簾　雲林

袖かよふ露けき秋のあはれさをそゝくゆふへはさひしかりけり
喜磨

夜鹿

さよふかくさひしきまくらにきけはまつ峯のかなたに鹿そなくなる
野例良

月前鹿

天つそらさやけき月にさそはれてさらの山かけにしかやなくらん
大平

野鹿

秋さむく草も枯ちる野の夕かせに声ふみわけて鹿そなくなる
野例良

とを山にほのみえし峯の端にいてゝつまこふしかの声そかなしき
京寛

田家鹿

苅あらし秋の田面のおしかなみつまとみえてなく鹿もなし
子引

橋邊鹿

風さむし寒よのあらしにしかのねかよふ木曽のかけはし
子亜

海邊鹿

みるめかるあまのたくなはにこゆる浪のいそねたちならし啼しかのこゑ
総義

余根岸にやまやけゝる秋鹿をきゝて

よそにかまをとふしかのこゑきけはまれなるひしきとみなれそゝ
一道

奈良にて鹿をきゝ

秋されはさをのかよそとて春日山みねにさそはゝしかそなくなる
喜磨

秋夕

目にはみえす耳にふれぬるかなしさをなへてあつめし秋のゆふくれ
八穂

家ためはいほにて秋のゆふくれはほろかなしくやみなおもふらん
有脩

むかし人秋のこゝろをとられなはいふへくひけや唐の夕くれ
常久

秋ふかく軒をとふよりおもの家にこもれるやよそのゆふくれ
寛光

秋来てはうさをたへしひとのよへかなかなしき独ねの夜ハおもかねど

田家秋夕　興清

夕かほにこつよるやどつどひてねぬるのゝ袖をかはかえし秋の田のおも

秋夕情　長英

風にちる露をもしこれを何となくなみだもろし秋のゆふぐれ

稲花子順従　亮寛

かゝしさへやちかくなるらんみなと田の小町のいねの風になみよる

稲妻　正美

山のはにうらよみ光をたのむこそ目にさえたつよひのいなつま

草縁集巻第五終

草縁集巻第六

天野政徳編

短歌部五

秋下

月　宣風

秋の夜の衣をもしまとぬ八月みてなかなかこゝろなかなかな

雨あられ雲をふらしそれくもるをとかみえぬ秋のよの月　狭汾良

よし月を花となるまでめでぬれどゆかぬ八秋のひかりなかりけり　八穂

ふけぬされきのふされぬなすれまくされをいひて月をとみるかな　安筋

てる月にかくれぬくれつゝしさえわかれしあらしさえさゆる秋のよ

久かたのてる月かけて秋のよはくましとをかしなくるもみなし

啓行
人ことしみ出まちて月にのこゝろをつくし秋のよいかな
寛長
しやまハむなしくねつれハときさへも月にいまれさわけわ
貞行
大ゐほくたえいかうのとしよて月のかつらにひとしまあかさん
流阿
あされとりもしほ人のこゝろからほやしやいかて月のこゆらん
月うたの中に　吉隆
ほかしらく月のこゝろやよしほくもれひくまそくるのもすしをなかる
かたくへたちる人ハしつめてまんかしむかふみそらの月はさやけき
月十五夜のかけに　有信
なかなかあつる天の川をうつしてもかゝうすのおもひをまかする月かけ
直利

いく秋かたれこし月のかけなからとしのことおもふさやけさ
廉に月をみて　時併
まちいる秋みるよりはかし廉しめ山寂のくあれとゝいつる月かけ
玄泊良
かつしかの床に月さしけるにかゝめれ嶺あたかあれハ
月出山　與清
くれわたるこよひハ偶田の川つらと月のこゑやこれさそれなくなれ
時風
西に日ハおちあとこれをひむかしの夕山まつに月のおかけわ
山月入簾　貞時
なとなるこうさんまたれてめつる夜のかさなる山といつる月かけ
今樹
山のたとれとれハ月のかけれわてかけぬとをれのもちとさやけし
秋月如霜
かつらきの跡やなくかくいとひえんまるまれみえるる秋の月かけ

あふさかのをのミねハなからぬ人もとめし秋の夜の月　此游良

月似鏡

かゝらほねむすふしのかけ新山の月こそ光のよろかゝみなれ　長叔

閑見月

月夜よし夜よしと告て人まつハそれもこゝろのくまともなん　野洲良

翫月

月いつるころをまちまちくらしわたれてそむかふやまのたれそら　常久

毎夜見月

まちわひし焼のあかねとぬる玉の夜かちかはれ月とらくるかな　八穂

禁中月

ことさらに夜さへ立出て秋の夜の月のしもふかさ記のもし　春門

閑居月

八重山も志くれる軒ハ秋の夜の月のひかりうくそなかりける　建胤

山家月

谷ふかくしめつくる庵ハ秋かせのみねよりおろす軒の月かけ　定保

家のみか人ハこちくのさゝはみぬ月かけ契きき秋の山さと　菱子

奥く山の志木の板戸ハさゝすしてひとりふかす月をみるかな　瑾子

田家月

いつしかと門田のいなほ多つきて八束穂みゆる秋の夜の月　八穂

綿やのよこ山のよそにみえはきて門田にのこるさくの月　貞民

古宅月

はれにし軒の板まくこのころハとさしめける月のかけかな　千川

故人月

ふるさとの軒もる月ハ秋ふかにみあらしてそ澄まさりける　季齋

閨月　尭磨

独ねにやよふかまてをしけん衣袖たまつむねやの月かけ

名所月　春庭

秋ふかきをはすて山のよその月はそれハいつれさらしなのさと

安道良

いつくしはいつくかしらん夕しほのみつのみまへの秋のよの月

三日月　八穂

さゝかにのいとにかゝれる露にもろくやとれるみか月のかけ

八月十五夜　春庭

名にたかきこよひちかハねてあかん人やなかさん秋のよれは

仲舒

山とめくカトかれ見かくひかりそこよひの月はいさせほてこん

八月十五夜によれやとかにてきこゆるよみのうちの分　憲善

かそへねとまちてひかりのさやけさにこよひとまちし秋の中八

中秋十五夜月蝕　興清

久かたの月の桂てはちひえてひかりのさそふ秋のなかそら

八月十六日の夜月を待て　久栽

ときされにせいさよひはまたれにき名におふ月のゐてぬさきかたに

待月　翺之

まつよにハくもしや月ハ山のはをといつまてあかれこゝろいられは

居待月　茂岡

白露のおきゐてまつの梢おはなにとてそひる月のさやけさ

臥待月　尭磨

さよふかくおれのまま月ハいてにやかねてまちみんとたれかちきりし

廿日月　宣風

こよひまてねんせてまちし月かけとゆるかなこの庭のかちにやこえん

月下言の中に生る月　徳風

よはにかる秋萩はらそひしそれさの露よりもしむあかはけの月　與清

九月十三夜

ことしあれはまたれしはかりこひしかな杯のみなとの後の月かけ　茶

月はなを秋のなかをと思ひしにまた七月のよそはゝわ

偶田川にて十三夜の月をみて　今樹

にみさはつゝしのさらに七月の月のかゝれにさかせてしかな

山月　徳風

よしの山花と雪とのおもかけをこよひの月にうつしてそみる

坂月　子川

かきわたす音のしとおくむさしのゝはてさへこゆる秋のよの月

川月　春庭

まれのおもにおちし影そやかつてはひかわまとはせて月のたかるゝ

角田河に舟うけて月をみる　穂並

はみたかんは樹のなかみに舟うけてはるけさましこひ月をとみるかな

海上月　宣保

あま人のかつきのこゑもしきりなるさとゆるは月のしつくなゝわ

景敬

にれえのなれにはまよあらしてうらわたるにはやる月かけ

浦月　まは子

又かくひちさきのちさきにくまれてありあかしのうらにやみつらん

子世子

いかさかやんゆゝしん雲きれて月にはかしれうつまつくやね

江村月　常之

きそやらぬ入江のさとにくれそめてはしれたちる月そくはなき

隠家月

しかたれしはまのとまやの家の秋はましくまなき月なやとれる

古後月　子川

月かけはにほへる露の名にしおひてむすひたるまてさやけかりけれ
通顕

池上月

月かけのくもりをみかへし風にかはれる池のおもてなみわけや
東はるにくもつきしてみる月さらにまさるとよめる
寛光

世のちりにそめぬみ山のおくこそところの月のひかりなりけれ

麓月
八穂

くれ竹の千枝にいかゝそゝかゝる露のかけすら秋の夜の月
應章

関月

三その子枝の露さえこゆるかれしみるゝのよのあきのよの月
完早

ゆくさかやせきのゆきけぬまたこえ来るとこゆるまつみけの月

橋月
芳沈

秋かせにをちかたみえぬをちかたの月にみえたるまきのはしかな

貞民

なれゆきさやかにはみてふくまつのしたにうつろふ月の枝もなし

井月
寛光

かつくみやあふくかせに月されてもとめしつく枝の葉末の水

鐘邑月
貞民

秋をへてみる月かけにさしひくいまにかゝるはえのもしほを

市月
武長

ゆうくれあきのなかしひとみる月のひかりにかへん市ものともな

月夜浦
興清

月かけにうらふくかせのあふえてあはれをまさる秋のうらなみ

月前遠情
兼寛

さやかなる月にひかれつ見には出るす磨のうらの人

月前旅
加代子

まれにゆく月にくもまちまてや旅人くれにいそくらし

のぼるまてさしてやれなるよ天河月の上ゆくなにれいかだし　有信

漁父棹月　汝阿良

釣れ月みるめとよされ汝つれにさをさしいつるあまれちしも

樵夫帰月　寛長

こりかつくつま木の露にやとかして深山の月をもちかへりしな

月前行客　子世子

ねきつくかねにひとりおとろかて月にさまよひやうかれゆくらん

月前旅　生沈

いかに子等月いとたえしそよまつたひねやにへを相やゆくへを

月はあはれとそなかる　寛光

あらみつゆく神し月の中なるはよひくさにかけとみましを

松間月　大平

くもおちて月のひかりをさしかくしたる心みえゆくみねの松風

月前松　後洸

ゆくはなもかくしもやしくれにはまかせぬまつをてらす月かけ

月前杉　志け子

みわ山やちかへぬ杉のこすゑにも秋のしるしハ月にみえけり

月似心　宗寛

あしかれにうつれる月ハ心よき人のこころはいかにかるらん

雨中思月　喜麿

雲まちや月をやあまもまちわひて雨にあはれをふかきこゝろかな

惜月　春門

月のいるをそおしね山ハたかくともたなひけゆふて秋のさやさ森

隅田河原に月見にいおて吟かる　子川

にみたはかさねれなをそれかけあけて入まれかたき月かたふきぬ

月前述懐　完早

今ハまてありといつるてにし山のなをさとらやましくもいつる月かけ

月前落葉　　志げ子

いつとしれぬふのあれの葉の月てらしれなかぬめてかげぞちる

月前秋友　　守固

人こころつねゆくめる秋の中にかはらぬともやかはれよの月

初雁　　流石

誰はなれさるれ雲まともしるしにおへる月のかげにひくらん

雁　　北河良

よく世わたるてふすみれいかなれやかはとのこねになきまたるらん

　　去英

はみなれし門田のくろの松はぢまねくをばとかはにたわ

　　直賢

こゑをとおになけていくへのくものなみとを見けてまたるゝ天つかりかね

海上初雁　　芳子

ゆくふねに楫のとさへてまたるみのやしおちまたるる秋のかりかね

蘆葦初雁　　周朝

鴫のやれかつしのましをかはかねのこゑめつらしきあきのゆふくれ

蘆葦雁　　與清

たえまなき浦のかはかれに鳴くこゑかなかはれなきまつを

夕雁　　八種

夕まくれくもゐをたかくよみかはあまつをとめにやよやかるらん

　　應章

さかにはまみれよあれに夕月にかきつるねなるかはれなきまつさ

　　寛光

おほかくるほにへのかやの玉つさやしれつるかたのつかひなるらん

月前雁　　八種

をちこちのむらさとにゆるかはかねのさやかにみゆる秋のよの月

　　芳子

みよしのや田面の月にこゑなくてゆるぞよしとかはかなくらめ

浦雁　好秋

なにはかたいりしとみしは波の上にかきつらねたるかりのたまつさ

海邊雁　時風

こゑにしもやさしはいとゝ夕くれのまかきかうしあさとこゆるかりかね

孤雁　春門

はなれさへつらなるかりのふたつなき月のまへゆくかけのひとつら

雁成字　長収

くるかりハつらぬ文字とみゆるかなちれかゝるまゝにしきんゆきかへるらむ

月前雁　承

うきものにつゝめる玉のひかりかも雁の中なるよそれの月かけ

川雁　寛光

つまこめし跡なおもくて鰍の門や八手垣つくる浪のうちきかは

海邊雁　春門

たちならふ礒山まつもおもはれは波のおひつゝみゆるあとけさハたかにき

秋の夕かつしかの吉間にて　永能

夕つくひ入江の波の岸を絶ておかたちまたる吉間の跡もなし

擣衣　八穂

秋の田のふれかれおもののたえゆくやよそのころもかれころもうつなん

擣衣　承

夕霧をたつのしまにおもひあかしあさむのころもうつハたかつま

隣擣衣　政廣

へたてなくにのみえとなりのよさむをも擣にかけておくあさかな

里擣衣　野例良

夢のさめにしおもハねと鶴のかつわれきぬやつゝれやまさと

海邊擣衣　茂園

うらなみのよるさへかきぬいとなみにいとなくてあまのころもうつなる

時風

一夜なれかれなてあまれくまたゆく衣手をとうれころもうつあなる

月下擣衣　此雄

小山田の稲葉のつゆの月かけてきぬたのいはにころもうつなり

南北擣衣　春門

いそたてゝころもうつなりくもり白の横山のくものをちこちのさと

鶉　長英

秋たけの下葉いろつくこや野みの秋風をさむみうつらなくなり

夕鶉　厚

夕霧のうつしの床におきたるは秋ふかくされたれはなけけり

百舌鳥　承

秋ふかきけしきの森のこゑしにゝ尾羽すゝしれのあをしさむけし

野分　斐麿

おもたれて手ゆるされのにちくはおもかけの風をむつましきかな

九月九日　京寛

ちよまてとけふのためしのあるよとて菊の露うつるいちのなき人

重陽　野例良

なか月のくものたかねそのかみハ菊なかまうてかはくちひかれ

重陽宴　春門

雲居にさしてるの庭のしら菊にかはるくものかけそみえける

九日菊の花をまなとも　與清

うつろはぬものハあさてそとのこひこん花とまかゆとおもふのきやうれ

菊　時風

なか月をまちつるもせのこもちてやなひたてゝ菊きそにくゐか

栽菊　仲舒

大かたの花のをちぬと我ものにはなれハふかしませのしたく

子世子

うつしうゑてことしの秋のきくのそなにはなかの山路をやよのみちのかな

菊露　春登

さくはのくれのほにおく露をかれにとかなこん秋やいくへき

うつろへし庭にさかりはすぎぬれどいろくれなゐの露かな　附儔

女郎花のちりたる所

さくらなのをしのこれるをかなしれの秋風いかにさゆらん　承

紅葉

けさこそはよものしぐれのおとにきてはやとなれば庭のもみぢちりたる　春木

しぐれつるみねのもみぢの夕ばかりけさはかいろまくまでにみちたる　義隆

さくらばなもみぢしたるを

みしきよの秋さらに木々ともみぢして散るひいよゝあはれのやまかせ　董蔵

初紅葉

かつちるも梢をこのしぐれふかはへてよしかひはあわけれ　千川

なほかへ木又山くちのうれにもみぢあきと見ればおくれ川かへてこそ　與倩

紅葉浅

そめそめてはちるなる秋かぜのこの葉世にとるあはれとしれかし　政喜

浅みどりのこれ青葉のしたにもみぢ露にまだしきほどもみえける　定保

ゆくあきにころもめにはなほもみぢうつろふかげをしらでにほふらし　家寛

紅葉半深

うれくこれふたもとの山のもみぢはなかばそめてけしきにぞなれる　基之

まだ白山志ぐれそめにしもみぢをば今ひとしほとかみやまつらん　知懿

紅葉浅深

なかくれにいろこそくるる山しらやおくれしこのねのもみぢ　尭磨

山紅葉

下もまてのこぬ木の山の色のもみぢとなけし森のしぐれに　春庭

林紅葉　寛光

とゆるひのほかたはいさ山の秋かせにさやしをさやくはとみちをわかな

樹紅葉　八種

落たきついはにくたけてちる玉をつゝむはもみちのかけのしたかは

川紅葉　長英

山川のみなかみまさりぬらしくれにはもみちにかゝるそふかくみえける

通顕

たまはれいさにせかれてゆく水にちりしみもみちのかけそくたくる

秋紅葉　徳風

ふかくこそ見にそきつれからころもたつされ山のよものにしきを

嶺間紅葉　興倩

うは葉のえたわけるにもみちのゑとかて急にしく似たるかみちし山かな

雨中紅葉　こつゑ

たちよれはあるもみちのてわきひてそてにやしらめとかれむしさめ

九月つかたの山寺へもみちみにいましたまひしとせ父もたれそにおもして院暗僧帰早山紅日晩遅といふからうたを思ひ出てそのこゝろを　寛光

まちえてあれ秋もふかき山てらにいかひとかれこすみねのもみちを

暮紅葉　孝磨

こゝろてゆかさくらぬ山の暮かつゝつひにもみちる松もみまくて

宣風

そゝめかりかへそまくれはをちれしかきもへ夕日にかゝる暮のもみちを

九月尽日に　永能

尾やくをしきれさとれ夕日かわこゝろをまくは三日る秋かれ

九月のあわや暮垣内にひとわたりあかしとて　寛光

とみちもし垣ねの暮のいろかしてかゝるもれたちれやよの秋かな

暮秋　八種

うかりける秋はかきりとなりぬれとをしむこゝろはてしやはする

應章

なかめこしゆふへのあはれさへけふをかきりの秋となりにき

政方

いつかたに秋はいぬらん山風にちるもみちはをぬさとたむけて

俊統

ゆかぬまに暮ぬる秋をしたふよわはいつちそあきの七月の名は

正義

さひしさのかきりなるらん暮ぬとみちもうつろひてし秋の山もと

山暮秋　常久

今はとてさしもみやの秋やとよそにくれゆくなこりをしけれ

暮秋菓　隆豊

百千よのうつろふ草にきかせてもくれゆく秋のをしくもあるかな

暮秋虫　子川

おなしくは秋をかきりてすむ虫のいつまてもなけかへのこほろき

縫季送秋　堯麿

いつこにかひとりゆくらん秋はやいさはかへせの山もとのかね

東海ちよし人毎に秋を惜むといふまても　子川

ゆく秋をとしむまさぬそ山てしれかねまてもしなかれ夕暮

れへの隣華は　春登

やとれかし月とむしとのよはかさなるうつろひそわかれのへの隣ちらん

秋日山行　春門

風ふけていまにまろふ紫栗のいかの山ちの秋そさひしき

山路秋行　子川

谷のきくみねのもみちになくさめて秋の山ちはこゝろゆたかに

安新

麻のちる小萱のあなたにきこえてや秋おほしろきしかの山こえ

てう子

さくらかりしみやまは秋もまさりけることをみねのもみぢも

宣光

九月

なくしかのこゑにおどろきすむやどの秋はふかくなりにけるかなと

定保

世の人のことをあはれとうつしてもなをまさるらめ菊月かな

秋彦

おくもみぢさそふにゆくん秋をしたふあつさをさへのこされたるは

克磨に

ながき世に末をとひよとねがひしかひもなくやうつりて今は長月のころ

九月尽

政美

暮はしも雨は雪ともかへんあすもまことのふゆにかあれ

時風

ともみぢばこの夕まぐれとどめにて入ぬるをかすむ秋もくれゆく

言行

秋野

秋は野の花をとる宿にうつしへてけふくれぬめとかへるわりひと

正て

秋の野のちくさの露に身をなさばこころのかぎり花にねなまし

独□良

秋山

うき世をばかくれんと思ふ山のはを月のためとて何いとふらん

盛章

秋山家

松の風は谷のあらしと家のしるべあつめてかなし秋の山ずみ

應章

なにごとかく秋はさびしきものかはと山はうき世のなかとしもなき

春門

秋浦

舟人の夜ぶかきはたかし秋の月あかしのうらにきてはおもふ舞

子門

放生会

けふとてやちなみてはかのつきまくにさひさつ鳩のこゑの飛まき

宣風

ちなたれし昔ハひれふり嶺をれかけさへみゆる秋の夜の月

砧　喜麿

うちわひてこれたゆまれぬうつきぬたまつらふ宿ハのちゝはにきぬ

秋夕　應章

雲ゐなる岸に行らしや吹めらんうきハ今かる秋の寝をつ

秋雲　景寛

雨とふり風とみさゝる秋のくもハ月に萩にいとふたよりなり

秋来　知道

いくたひかさめてハむすふ手枕におとろかし覚みる秋のよなかさ

秋夜長　正義

さよしひとかけつくしてよむふみのかすはしらてあかぬのよなかさ

秋夢　京寛

秋のよの月まちかねて寝にしあれハ夢のひとまのかれこゝろなけれ

秋神祇　雅良

にへ物の稲倉のためしにひかへていけるをたらつけの代神まさ

定保

ほみちなる雲ゐならはされかさねてひかりやとおはまほし

由姫

草縁集巻第六終